

社会委員会通信

No. 58

2021. 9. 5

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、人々や社会の営みは大きく制限されています。なかでも経済活動の制限は、多くの生活困窮者を生み出す深刻な事態を招いています。

他方、オリンピック・パラリンピックについては、多くの人々が強い反対の意思を示したにもかかわらず、強行開催されました。私たちは、このイベント開催中も、コロナ感染者が増え続けたこと、医療機関が逼迫状況に陥ったことを記憶にとどめておく必要があります。

「復興五輪」「コロナに打ち勝った証しとしての五輪」などと喧伝されたこの東京大会の「崇高な意義」の背後には、巨額の「五輪マネー」があることが誰の目にも明らかになりました。とりわけこの大会の招致～実施のプロセスは、オリンピックという「商品」から生み出される「利益」の「分け前」に与る人々の「祭りごと＝まつりごと（政）」であったことがより鮮明になりました。かつて「平和の祭典」と呼ばれた五輪は、「平和」の実現に寄与するどころではなく、むしろ人々を分断するためのものになったように映ります。私たちは、この8月の東京大会の「狂騒」を冷静に捉え、私たちの求める「平和」について深く考えたいと思います。

『社会委員会通信』第58号は、子どもの教会の礼拝説教を掲載いたしました。ご存知の通り、子どもの教会は8月を「平和月間」としており、信徒・牧師による平和メッセージが語り継がれています。教会員の皆さまにおかれましては、それらのメッセージをお読みいただき、イエスが示した「平和」について、改めて思い致す機会にさせていただきたく存じます。

(社会委員長：K・A)



平和を実現する人

8月1日（第1主日）

K・A

【聖書】 マタイによる福音書 5章8節～10節(p.6)

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

私が勤めている学校では、以前、研修旅行で長崎を訪問していました。研修の主な目的は戦争と平和・キリスト教の文化と歴史・九州の自然を学ぶことです。

研修の1日目には、戦争と平和について学ぶ

ため、長崎の原爆の被害に遭った方の体験を聞きます。語り部は和田耕一さんという方です。和田さんは長崎を訪問する子どもたちに繰り返し長崎の被爆体験を語っておられ、長崎ではよく知られた語り部の一人です。残念なことに、今年

7月に和田さんが亡くなったというニュースをネット記事で読みました。94歳でした。和田さんからお話を聞くことはできなくなりましたが、和田さんが経験した長崎での出来事、また和田さんの平和への想いは語り継がれるべきものです。私はこの研修旅行を何回か引率し、その度に和田さんの話を伺いました。お話を伺う度に、戦争・核兵器の悲惨さに心が痛み、平和を求め続けることの大切さを再確認しました。

そこで今日は、和田さんのお話を紹介し、戦争と平和について考えたいと思います。

「1944年、造船所の人手不足のため、私は学校での学習をやめさせられ、そこで働くことになりました。私は身体が小さかったため、体力もなく、10日間ほどの間、泣きながら働きました。日本の戦局が日を追うごとに厳しくなっていく頃です。

そんなとき、長崎市内の路面電車の運転手と車掌の募集がありました。造船所での体力を必要とする仕事より向いているだろうと思い、私は運転手に応募し、働き始めました。

しかし路面電車の運転手となっても、仕事は簡単ではありませんでした。始発の5時半から夜の12時半まで19時間働き続けることもありました。

1945年になり、戦局はますます厳しくなりました。広島では新型爆弾が投下され、広島市内が全滅するというニュースも耳にしました。けれども私はなぜか、『長崎は大丈夫だ』という自信をどこかにもっていました。

原子爆弾が午前11時2分に長崎に投下されたとき、私は爆心地から3.2kmの所にいました。今でも路面電車の駅がある『蛸茶屋』という駅です。この日はいつもと同じように5時半の始発から運行していましたが、8時頃に脱線事故が起きました。路面電車40台あまりが動けない状態となりました。後で調べたら、この事故がなけれ

ば、原爆投下の瞬間、私はまさに爆心地を運転していたこととなります。

原爆の威力は凄まじいものでした。その閃光はものすごい光です。表現できないほどの光に包まれます。爆風は台風の何倍もの威力をもち、放射能を含んだ超高温の熱線を放ちます。爆心地から3.2km離れていた私も、その威力になぜ自分が転がっているのか分からないほどでした。

長崎は恐ろしい光景となっていました。近くには血だらけの子どもがいました。助けようと病院に連れて行きました。病院に連れて行くと、そこにはおびただしい人が担ぎ込まれていました。小学校に作られた救護所も原爆の被害を受けた大勢の人がいました。人々は「浦上が大変だ」と口々に話していました。また私は、熱線で焼け焦げた『黒い塊』となった赤ん坊も見ました。『この赤ん坊は戦争に何の関係もないのに…』という思いに駆られました。

原子爆弾によって、私は親友の田中をはじめ、多くの仲間を失いました。原爆の熱線によって焼け焦げた田中は、かろうじて人間の姿に見えるものの、無残な姿に変わり果てていました。田中の身体は小刻みに震えていました。かすかに話す小さな声に耳を傾けたとき、田中の次の言葉が届きました。

『僕はなんもしとらん…、僕はなんもしとらん…』。

私は、はじめ田中の話す言葉の意味がわかりませんでした。しかし、それはまさしく原爆とその被害に遭ったことだとわかりました。田中はその小さな言葉を発した後に息絶えてしまいました。

私は、同じ路面電車でも働く仲間と共に田中を荼毘に付しました。その光景は今でも私の目に焼き付いています。そして田中の遺骨は郷里の五島に届けました。私は、『僕はなんもしとらん…』と語った田中が、今もなお祈っていると思います。それは『僕のような人間を作らないでくだ

さい』という田中の祈りです。もちろんそれは、戦争をなくすこと、核兵器をなくすことです。

私は被爆者として、戦争がなくなるように、核兵器がなくなるように被爆体験を語っています。ですが、被爆者である語り部はやがて絶えてしまうでしょう。

人類の希望として、どうしたら平和が実現できるのかを考えてください。それが皆さんの仕事です。どうしたら戦争がなくなるのか、どうしたら核兵器がなくなるのか、考えてください。

以上が、和田さんのお話です。

和田さんは、長崎の原爆によって、友人や同僚を失い、地獄と化した長崎を見ました。戦後も貧困に苦しみ、絶望に苛まれたそうです。それでも和田さんは心を砕いて、戦争と核兵器のない平和な未来を、私たちに実現するようにと訴えました。また和田さんは、平和の実現を考えることが私たちの「仕事」であると訴えています。

和田さんの訴えは私たちにも届いています。けれども、平和が実現されているとはいいい難いように思います。人間が人間を傷つけることが今もなお続いています。

ミャンマーでは軍事クーデターが起こり、人々に銃が向けられています。

シリアでは長く続く内戦によって、多くの人々が難民となっています。

「天井のない監獄」と呼ばれているパレスチナでは、イスラエルによる空爆が何度もありました。

私たちの世界は、まだ平和は実現していません。しかし、教会に繋がる私たちは、イエスが示した平和を諦めてはならないと思います。聖書を読む私たちは、「平和を実現する人」となることが求められています。私たちは、もう一度、聖書の示す平和を考え、「平和を実現する人」として歩みたいと思います。改めてイエスのメッセージに耳を傾けたいと思います。

心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。

平和な日々感謝



8月8日（第2主日）

Y・O

【聖書】 エレミヤ書 29 章 1 節～14 節 (p.1229)

以下に記すのは、ネブカドネツアルがエルサレムからバビロンへ捕囚として連れて行った長老、祭司、預言者たち、および民のすべてに、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の文面である。それは、エコンヤ王、太后、宦官、ユダとエルサレムの高官、工匠と鍛冶とがエルサレムを去った後のことである。この手紙は、ユダの王ゼデキヤが、バビロンの王ネブカドネツアルのもとに派遣したシャファンの子エルアサとヒルキヤの子ゲマルヤに託された。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口

を増やし、減らしてはならない。わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。

イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたたちのところにいる預言者や占い師たちにだまされてはならない。彼らの見た夢に従ってはならない。彼らは、わたしの名を使って偽りの預言をしているからである。わたしは、彼らを遣わしてはいない、と主は言われる。

主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやつたが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追い出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。

私は 78 歳のおばあちゃんです。終戦は3歳の時でした。戦争はほとんど覚えておりません。

敗戦の数日後、海外で日本語学校の教師をしていた父に連れられ、親子5人、船で引き揚げてきました。

父は教育の大切さを心に秘めて、帰国後も学校教育に携わってきました。終戦後、全国的に食料不足の時代に、私たち子供3人は「お腹がすいたよう」といつもひもじがっていたと、母から後に聞かされました。

このような時代に私たち子供が元気に育つたことに、今は亡き両親に感謝の気持ちでいっぱいです。我が国では豊かで平和な日々を過ごしていますが、テレビ、新聞等の報道により、戦争状態にある国のことを見聞します。非常に心が痛みます。

日本の国が、平和で安心して生活ができる喜びをかみしめております。世界の人々が武器を捨てて皆で手を繋ぐ日の来ることが、私の望みです。



平和について

8月15日（第3主日）

M・K

【聖書】 コリントの信徒への手紙二 13章11節(p.341)

終わりに、兄弟たち、喜びなさい。完全な者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。

今から 76 年前に第 2 次世界大戦が終結しました。日本はアメリカやヨーロッパ諸国を中心とする連合軍に敗北しました。それまでの日本は天皇中心の軍国主義の国で私たち国民一人

一人の人権はありませんでした。戦争に負けた時、連合国から約束させられたことがあります。○日本国民を欺いて世界征服に乗り出す過ちを犯させた勢力を永久に除去する。

○我々は日本政府が全日本軍の即時無条件降伏を宣言し、またその行動について日本政府が十分に保障することを求める。(抜粋 ポツダム宣言より)

このポツダム宣言を速やかに受け入れなかったために8月6日広島に、ついで8月9日長崎に原子力爆弾が投下されました。広島で14万人、長崎で7万4千人もの人が亡くなりました。(推定)世界で初めて原子力爆弾が投下されたのです。そしてこのあと、原子力爆弾が使用された国はありません。日本が唯一の被爆国なのです。

戦争での被害や死者は日本だけではなく、この戦争にかかわっていた50か国以上の国で5千万人を超える犠牲者が出ました。戦争は絶対に行ってはいけません。戦争に勝っても負けても犠牲者はたくさん出ます。何一つ良いことはありません。それなのに、現在でも世界のどこかの国や地域で戦争や紛争が起こっています。何故でしょうか？戦争には様々な理由があります。人種や民族の違いで争いごとが起きる時、政治的な考え方の違いで話し合いでは解決できなかった時、宗教の違いで争いごとが起こってしまった時。様々な理由を付けて戦争をしますが、それは間違った考え方によりますし、間違った行動です。話し合いに食い違いが起きた時、すぐに武器を持って戦うのではなく「外交」という国と国との話し合いを十分に重ねて互いに理解を得るまで議論するべきだと思います。

日本は戦争に負けて、新しい憲法が作られました。

第9条【戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認】

①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達成するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

このような徹底した「平和憲法」を持っている国はほかに例がありません。この憲法のおかげで日本は第2次世界大戦以降、一度も戦争を起こしていません。世界193か国の独立国の中で76年間戦争をしていない国は日本しかありません。憲法9条を大切にしていきたいと思います。

平和とは私達の生活にかかせないこの世で一番大切な事だと思います。私達一人一人にこの平和な生活を送る権利があると思います。けれど、このだれもが大切な平和を、自分たちの手で壊しているのが現状です。

平和という言葉の中には戦争や紛争をしないこと以外に国自体が貧しくて、国民に十分な食糧や薬、日々を安心して暮らせる生活を与えることができない国もあるので、そのような国に対して豊かな国が援助するということも含まれているように思います。日本のような豊かで何でも手に入る国ではないので、小さな子供たちが病気にかからないようにワクチンを打ってもらいますが、そのワクチンさえ買えない国があるのです。日本やアメリカ、中国、ヨーロッパ諸国の豊かな国が貧しい国を助けてあげて、食料や薬、衣料品など生活に必要な物資を送っている事業も行っています。世界の国々の貧富の差がなくなり、世界の誰もが安心して暮らせる国造りのお手伝いをほんの少しでも出来たらうれしいですね。

また、環境を破壊するようなプラスチックのストローやレジ袋をなくすことや、ごみを出来るだけ少なくする努力は今すぐにでも出来ることです。

私たちに出来ること、例えばペットボトル1本分(¥150-)のお金を寄付したら、そのお金で小児マヒのポリオワクチン(¥20-)が7本買えます。皆さんがもらうお小遣いのうち¥100-でも寄付することができたら、世界のどこかで赤ちゃんや子供たちの命が救われるのです。自分のことだけではなく、誰かのためになることが

一つできたら、その日 1 日が幸せな気分になることでしょう。

戦争は世界中の問題です。その問題を解決するためにも、戦争をしている国も、戦争をしていない国も、今、この時にこの問題について真剣に取り組むべきです。

そのためにも、今、国民の一人一人がこの問題に取り組むべきです。確かに、一人だけの力は小さいかもしれないけど、「戦争をしてはいけない」「争いごとはいやだ」という声や気持ちが

たくさん集まれば、きっと何かを変える事ができると思います。

今、こうしている間にも世界のどこかで命を奪われているかもしれないのです。

今、こうしている間にも戦争をやめてほしいと願っている人がいるはずなのです。

あなたも戦争をやめてほしいと祈ってみてください。きっとどこかで助けられる人がいるはずです。

『アオギリのねがい』



8月22日（第4主日）

K・Y

【聖書】 マタイによる福音書 5章9節(p.6)

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

今日は『アオギリのねがい』という題名の絵本についてお話しさせていただきたいと思います。今からもう 12 年も前の夏のことですが、久しぶりに広島に行くことが出来ました。広島には昔わたしの叔父が住んでいました。初めて広島に行った時の記憶を思い出しながら、平和公園や平和記念資料館を時間をかけてゆっくり見学することが出来ました。その平和記念資料館のなかのお店で『アオギリのねがい』という絵本に出会いました。

この絵本は「被爆アオギリ二世」と名づけられたアオギリという木の苗を、大切に育てている小学生のみなさんの思いを基にして出来上がったそうです。

絵本のお話は一本のアオギリの苗木が届けられた小学校から始まっています。苗木のお母さんであるアオギリの木は、広島の平和公園というところに、いろんな木々と一緒に植えられていました。平和公園を訪れる人々は、大人も子供

も木々の木陰で心地よく楽しい時間を過ごすことが出来ました。

ところが、戦争が激しくなった 1945 年 8 月 6 日の朝、広島に原子爆弾が落とされたのです。町はあっという間に火の海となり、見渡す限り焼け野原となりました。公園の木々もまっ黒に焼け焦げて、炭のようになりました。原子爆弾による放射能のせいで、広島にはこの先何十年もの間草木も木も生えないだろうと思われていました。

そんなある年の春のこと、まっ黒に焼けて枯れてしまったと思われていたアオギリの木に、小さな小さな緑の新しい芽が出ていたのです。アオギリが一生懸命に生きようとする姿を見て、原爆で体も心も傷ついていた人々は勇気付けられ、大きな力を与えられました。その小さな芽は成長してある秋の日に実をつけました。そして実にはたくさん小さな種が出来ました。放射能を浴びたことで心配されていた土に落ちた種は、ちゃんと元気に芽を出すことが出来まし

た。こうして被爆した母さんアオギリから育った子供たちの苗は「被爆アオギリ二世」と呼ばれて、広島市内の小学校に配られました。また修学旅行で平和公園を訪れた日本各地の小学校にも「平和の種」として旅立っていました。

一人でも多くの人々にこの絵本を通して被爆したアオギリのことを知っていただき、平和の尊さを、平和を愛し守る心を受け継いでいくことが出来ますように願っています。



ラザロとは誰か

8月29日（第5主日）

中沢 譲牧師

【聖書】 ルカによる福音書 16章 19節～25節 (p.141)

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもっていたが、ラザロは反対に悪いものをもっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』

本日の聖書箇所には、「金持ちとラザロ」という小見出しが付けられています。そこで皆さんにお尋ねしたいと思います。この物語を読んで、どのような感想を持ったでしょうか。

もしかしたら、「お金持ちは貧しい人を助けるべきだ」という話だと、この物語を受け止めたでしょうか。または教会に通っている私たちは、たとえわずかではあっても、ホームレスや貧しい人々を助けるために、献金をすべきだというメッセージとして、この物語を読まれたのでしょうか。そのように読んだとしても、必ずしも間違いとは言えないでしょう。

ところでみなさんはこれまで、「道徳的な物語」というのに接したことはありますか。学校でお話を聞いたり、小説やアニメの世界で、道徳的

な物語に接する機会があったかもしれません。不思議なことに、道徳的なお話というのは、どんなに良いお話であったとしても、私たちの記憶から失われてしまいます。なぜならば、貧しい人を助けることも、助けないことも、私たちの自由な選択に委ねられてしまうからです。気が向けば助けるし、気が向かなければ助けなくて良い、そういう話として「道徳的な物語」を受けとった場合、その物語はたちまちのうちに、私たちの生活に必要なものではなくなってしまうのです。

しかし皆さん、想像してみてください。「金持ちとラザロ」の話を、最初に聞いた人たちは誰であったのかということ。このイエス様のメッセージを最初に聞いた人たちのことを想像して

欲しいのです。お金持ちでしょうか。それとも律法学者たちでしょうか。もちろん、そういう人たちもいたでしょう。

それよりも多くの方が、その場にいたのではと、私は想像するのです。聖書に「群衆」と書かれた人たちの存在を想像するのです。名も無い「群衆」が、最初にイエス様のメッセージを聞いたのです。その人たちは特別な存在ではありませんでした。むしろ「ごく普通の人たち」であったのだと想像するのです。その「ごく普通の人たち」の中には、病気を患っている人もいたでしょう。貧しい人たちもいたでしょう。悲しみを抱えた人たちもいたかもしれません。お金持ちの家の前で、施しを待つ人もいたでしょう。重い皮膚病を患い、患部を犬から舐められて、悲しい思いをしている人もいたかもしれません。本日の物語に登場する「ラザロさん」は、イエス様に救いを求めて集まって来た人たちの姿でもあったと想像したのです。

もしそうであったのであれば、名も無い無数のラザロさんたちは、この「金持ちとラザロ」の話をどのような思いで聞いていたのでしょうか。私は慰めを与えられたのだと想像するのです。なぜならば、イエス様のところに人々が集まってきたのは、病を癒してもらうだけではなく、慰めと希望をも期待したからです。そして確かに、その人たちはイエス様から、慰めを与えられたのです。本日の聖書の物語がいちばん最初に語られた時、それは道德の物語ではなく、慰めと希望の物語として語られたのだ、ということを中心に留めたいのです。

同じルカによる福音書に、このような言葉があります。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」(ルカによる福音書 6 章 20～21 節)と。

このイエス様の幸いのメッセージは、貧しい人たち、飢えている人たち、泣いている人たちが、この言葉を耳にした時、実現したのです。そして本日の物語に置き換えるならば、「ラザロさんと同じ状況にある人たちは、幸いである」と宣言をされ、幸いを得たのです。

ラザロさんが「正しい人であった」とか、「良い人であった」と、聖書は伝えていません。「道德的に正しい人は幸いである」とは語られていないのです。そういうことは、ここでは関係ないのです。むしろこの譬え話で問題にされているのは、どんな人も最後は「死ぬ」ということです。つまり私たちはいつか、必ず死ぬのです。どんなにお金持ちになっても、自分の命をお金では買えないからです。そう考えてみると、誰もが弱い存在です。誰もが神様の恵みによってしか、生きることができない弱い存在なのです。そのためにイエス様は、十字架に架けられる必要があったのだとも言えます。

イエス様は、「私はあなたの味方だ」と、「ごく普通の人たち」に宣言されました。「いま貧しい人、いま飢えている人、いま泣いている人、私はそのような、あなた方の味方だ」と宣言されたのです。ですから「私は味方だ」と宣言された人たちの側に、イエス様の姿を見たいのです。イエス様の側に立って、「金持ちとラザロ」の物語を読みたいと願うのです。本日はその願いを、みなさんと分かち合いたいと思いました。お祈りします。

<祈り>

神様、聖書のみ言葉を感謝します。聖書には、あなたがどのような神であるのかが示されています。あなたが愛された人たちを、私たちも愛することができますように。

願いと感謝、イエス様のみ名を通してお祈りいたします。アーメン

【参考資料】

平和への誓い（2021年8月6日 広島平和記念式典から）

私たちには使命があります。

あの日、広島で起きた悲惨な出来事。そのことを知り、被爆者の方々の思いや願いを聞き、考え、平和の尊さや大切さを、世界中の人々や次の世代に伝えなければならないのです。

昭和20年（1945年）8月6日午前8時15分。赤く燃え、真っ黒に焼け焦げてボロボロになった広島町の町。「兄が死ぬより、わしが死んだ方がよかった」、大切な人が亡くなった悲しみと生き延びた者の苦しみには終わりがありません。

心に深く傷を負った被爆者は、それでも前を向き、「僕ら若人の力によって、きっと平和な世界を築き上げてみせる」と決意しました。悲しみや苦しみを抱えながらも、被爆者の方々は生きることを決して諦めず、共に支え合い、広島町の復興に向け立ち上がりました。

本当の別れは会えなくなるのではなく、忘れてしまうこと。私たちは、犠牲になられた方々を決して忘れてはいけません。私たちは、悲惨な過去をくり返してはいけません。

私たちの願いは、日本だけでなく、全ての国が平和であることです。そのために、小さな力でも世界を変えることができると信じて行動したい。誰もが幸せに暮らせる世の中にするのを、私たちは絶対に諦めたくありません。

争いのない未来、そして、この世界に生きる誰もが、心から平和だと言える日を目指し、努力し続けます。広島で育つ私たちは、使命を心に刻み、この思いを次の世代へつないでいきます。

令和3年（2021年）8月6日

こども代表

広島市立袋町小学校 6年 伊藤まりあ

広島市立五日市東小学校 6年 宅味 義将



平和への誓い（2021年8月9日 長崎平和記念式典から）

ふるさと長崎で93回目の夏を迎えました。大好きだった長崎の夏が76年前から変わってしまいました。戦時下は貧しいながらも楽しい生活がありました。しかし、原爆はそれさえも奪い去っ

てしまったのです。

当時、16歳の私は、大阪第一陸軍病院大阪日本赤十字看護専門学校の学生で、大阪の大空襲で病院が爆撃されたため、8月に長崎に帰郷していました。長崎では、日本赤十字社の看護婦が内外地の陸・海軍病院へ派遣され、私たち看護学生は自宅待機中でした。8月9日、私は現在の住吉町の自宅で被爆して、爆風により左半身に怪我を負いました。

被爆3日後、長崎県日赤支部より「キュウゴシュットウセヨ」との電報があり、新興善救護所へ動員されました。看護学生である私は、衛生兵や先輩看護婦の見様見真似（みようみまね）で救護に当たりました。3階建ての救護所には次々と被爆者が運ばれて、2階3階はすぐにいっぱいとなりました。亡くなる人も多く、戸板に乗せ女性2人で運動場まで運び出し、大きなトラックの荷台に角材を積み重ねるように遺体を投げ入れていました。解剖室へ運ばれる遺体もあり、胸から腹にわたりウジだらけになっている遺体を前に思わず逃げだそうとしました。その時、「それでも救護員か!」という衛生兵の声で我に返り頑張りました。

不眠不休で救護に当たりながら、行方のわからない父のことが心配になり、私自身も脚の傷にウジがわき、キリで刺すように痛む中、早朝から人馬の亡きがらや、瓦礫で道なき道を踏み越え歩き、辺りが暗くなるまで各救護所を捜しては新興善へ戻ったりの繰り返しでした。大怪我をした父を時津（とぎつ）国民学校でやっと捜すことができました。「お父さん生きていた！ 私、頑張って捜したよ!」と泣いて抱きつきました。

父を捜す途中、両手でおなかから飛び出した内臓を抱えぼうぜんと立っている男性、片脚で黒焦げのまま壁に寄りかかっている人、首がちぎれた乳飲み子に最後のお乳を含ませようとする若い母親を見ました。道ノ尾救護所では、小さい弟をおぶった男の子が「汽車の切符を買ってください」と声を掛けてきました。「どこへ行くの?」と聞くと、お父さんは亡くなり、「お母さんを捜しに諫早か大村まで行きたい」と、私より幼い兄弟がどこにいるか分からない母親を捜しているのです。救護しながら、あの幼い兄弟を思い、胸が詰まりました。

今年1月に、被爆者の悲願であった核兵器禁止条約が発効しました。核兵器廃絶への一人一人の小さな声が世界中の大きな声となり、若い世代の人たちがそれを受け継いでくれたからです。

今、私は大学から依頼を受けて「語り継ぐ被爆体験」の講演を行っています。

私たち被爆者は命ある限り語り継ぎ、核兵器廃絶と平和を訴え続けていくことを誓います。

2021年（令和3年）8月9日

被爆者代表 岡 信子